



センター

ふるさとで生活再建

南相馬へ

東日本大震災で被災した福島県南相馬市から避難していた自王帰宅を図る。住宅の建設作業だ。「地元がんばることで復興へのメッセージを示すしかない」と強調した。同区の専門学校生、渡部裕希さん(20)は、18日に再開する専門学校に通う住民21人が8日、チャーターしたバスで自王帰宅した。地元での生活再建を図る。

会社から「人手が欲しい」と連絡があったため、最初は自分の家族だけで

系魚川市に避難していた住民21人が8日、チャーターしたバスで自王帰宅した。地元での生活再建を図る。

鹿島区の会社員佐藤智康さん(34)。勤め先の建設会社から「人手が欲しい」と連絡があったため、最初は自分の家族だけで



自主帰宅する佐藤智康さん（中央）。糸魚川市職員に礼を言ってバスに乗り込んだ=8日、糸魚川市

新発田にいると安心
故郷のため力尽くす

避難所にノート 交流の場にも

う大学ノートが置かれたページには心の声がび
ノートを置いたのは、
新発田地域の青年農業士
でつくる「新発田ブロッ
ク農業士会」(津村賢会
長)。支援に向けた二一
ズを探そうと、3月24日
からA4判ノート2冊を
備え付けた。書き込む人
は子どもからお年寄りま
で幅広い。

「（ソル）になると安心して子どもと遊べます。普通の幸せが早く地元に戻ってきてきますように」「避難所で卒業式ができたことは一生忘れません」など安堵の気持ちや新発田への感謝の言葉が多い。

その一方で「育児中 メンバーの一人は、

「（ソル）になると安心して子どもと遊べます。普通の幸せが早く地元に戻ってきてきますように」「避難所で卒業式ができたことは一生忘れません」など安堵の気持ちや新発田への感謝の言葉が多くの人を書き込んだものもある。

同会のメンバー数人が一つ一つ返答しており、ノートは交流の場にもなっている。

「ここは天国 ふくまほじごく」という女、復興への決意…各

「どの書き込みが忘れられた。南相馬市の男性教員は、今日でこの新発田の地を去ります。(中略)何年いや何十年かかるか分かりませんが、わが故郷のために力を尽くすことが何よりの恩返し」と前を見据えていた。

同会事務局の佐藤康志さん(43)は、「避難している皆さんほつらへ立つようこなつた」。

「どの書き込みが忘れられた。南相馬市の男性教員は、今日でこの新発田の地を去ります。(中略)何年いや何十年かかるか分かりませんが、わが故郷のために力を尽くすことが何よりの恩返し」と前を見据えていた。

同会事務局の佐藤康志さん(43)は、「避難している皆さんほつらへ立つようこなつた」。

被災者の思いひつしり